

クモ女に
狂つてなお。

Polbuckle

どれくらい歩いただろう。

私は全てを失った。

いや、そもそも私には何もなかったのかもしれない。

自暴自棄になった私は

気付いたら名前も知らない山の

深い深いところに潜り込んでいた。

もう、戻ることもしかないな。

こんなときまで気取っている自分に苦笑いした。

そして間もなくソレに出会った。

ヒューー...

アアアア

その異形からそう思ったのか
それとも動物的感だろうか

ソレとは意思疎通など決して出来ないかと悟った。



その艶やかな身体に欲情した私は
いてもたってもいられなくなり
全てを脱ぎ捨てていた。

私は、何を思ったのか
いきり立った男性器をツレに突き付けていた。

トレ

トレ
トレ



ソレは嬉しそうにするぞ
青い舌を私の男性器に這わせた。



もう私は止まらなかつた。
男性器をおもむろにツレの口に挿し込む。





まもなく絶頂に達した私は
全身がガクガクと震え、
ソレの口内で勢いよく射精した。

ーアー

ソレは、ぱたりと倒れ込み

私に全てをさらけ出すようだった。

まるで、私に対して

「自由に犯して良いぞ」と言ってるようだった。

アハハハ



私が興味をもったのは、四つの乳房だった。

それを抑えつけ

みっちりとした乳房の間に

男性器を挟み込んだ。

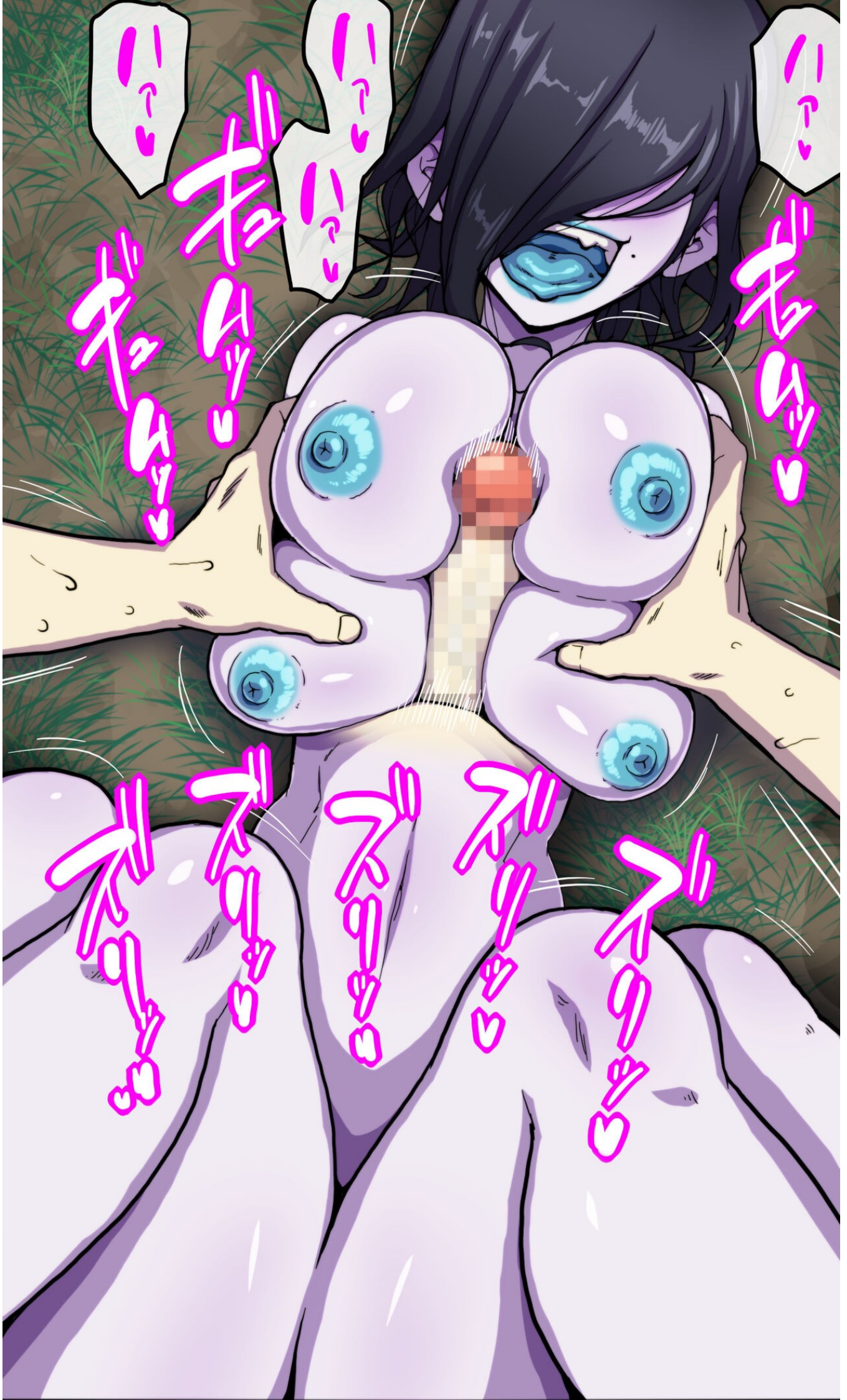
トビトビ...

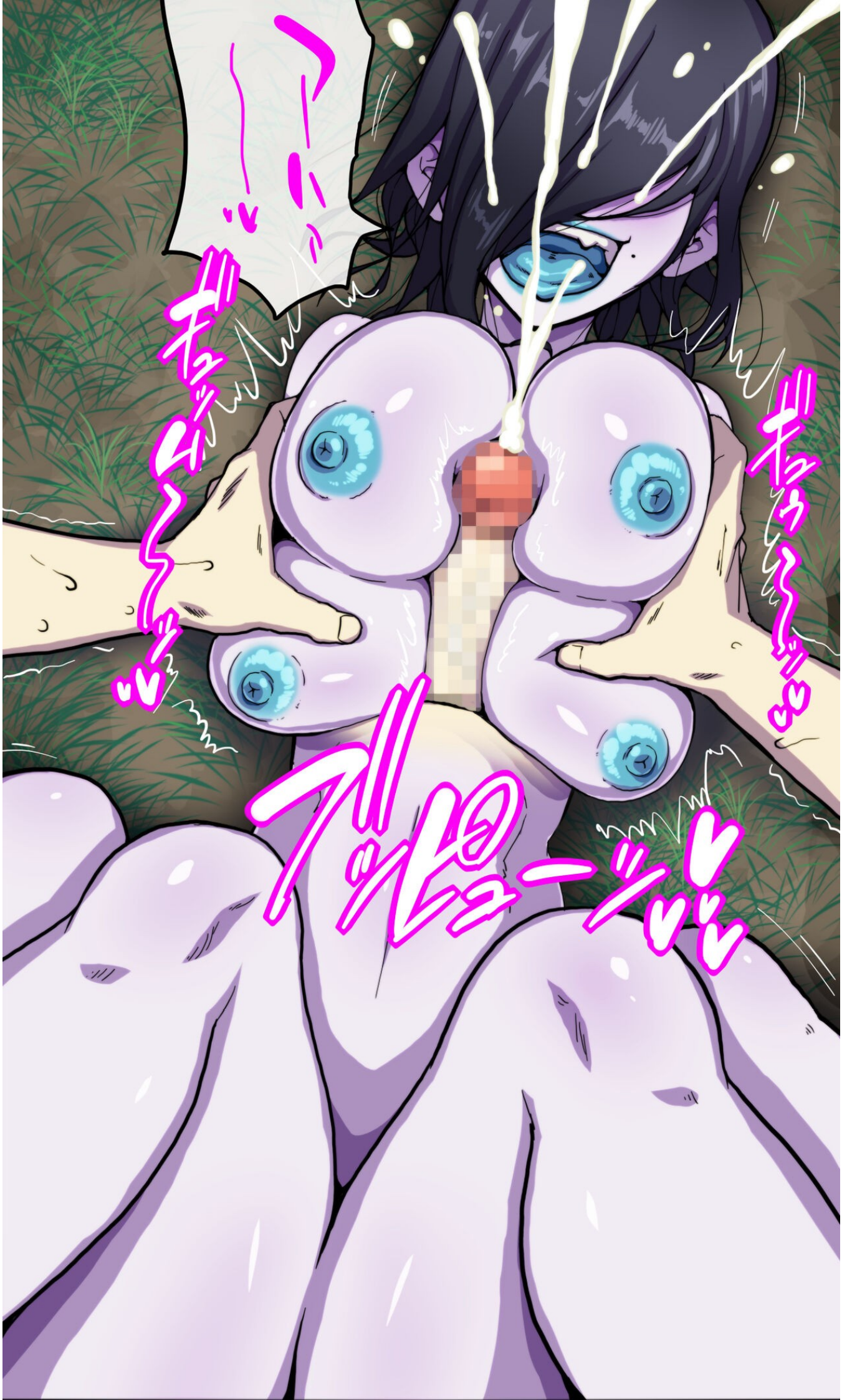
グニッ

グニッ

グニッ









やりたい放題している私に対して

なおもこちらを向いて股を開いてきた。

こんなバケモノでも人と同じモノが付いていた。

彼女は私を欲しているのだ。

断るほうが

失礼なのだ。

ニィー！

アッポッポ

ム%

ム%



「私はまだまだまだいけるぞ」

ムスコがそう言うってらるかのようだ

激しく脈打つのが感じた。

その先端を彼女に

押し付ける。

クワッ

クワッ

クワッ

クワッ

あまりの興奮、あるいは背徳感だろうか、
それらが私の脳を刺激し、
童貞のように射精しそうになる。

クワッ



ずぷりと挿入る。いやらしい肉が締め付ける。

その快感に思わず果てそうになるのをこらえた。

ソレもビクリと反応した。

こいつはいやらしい

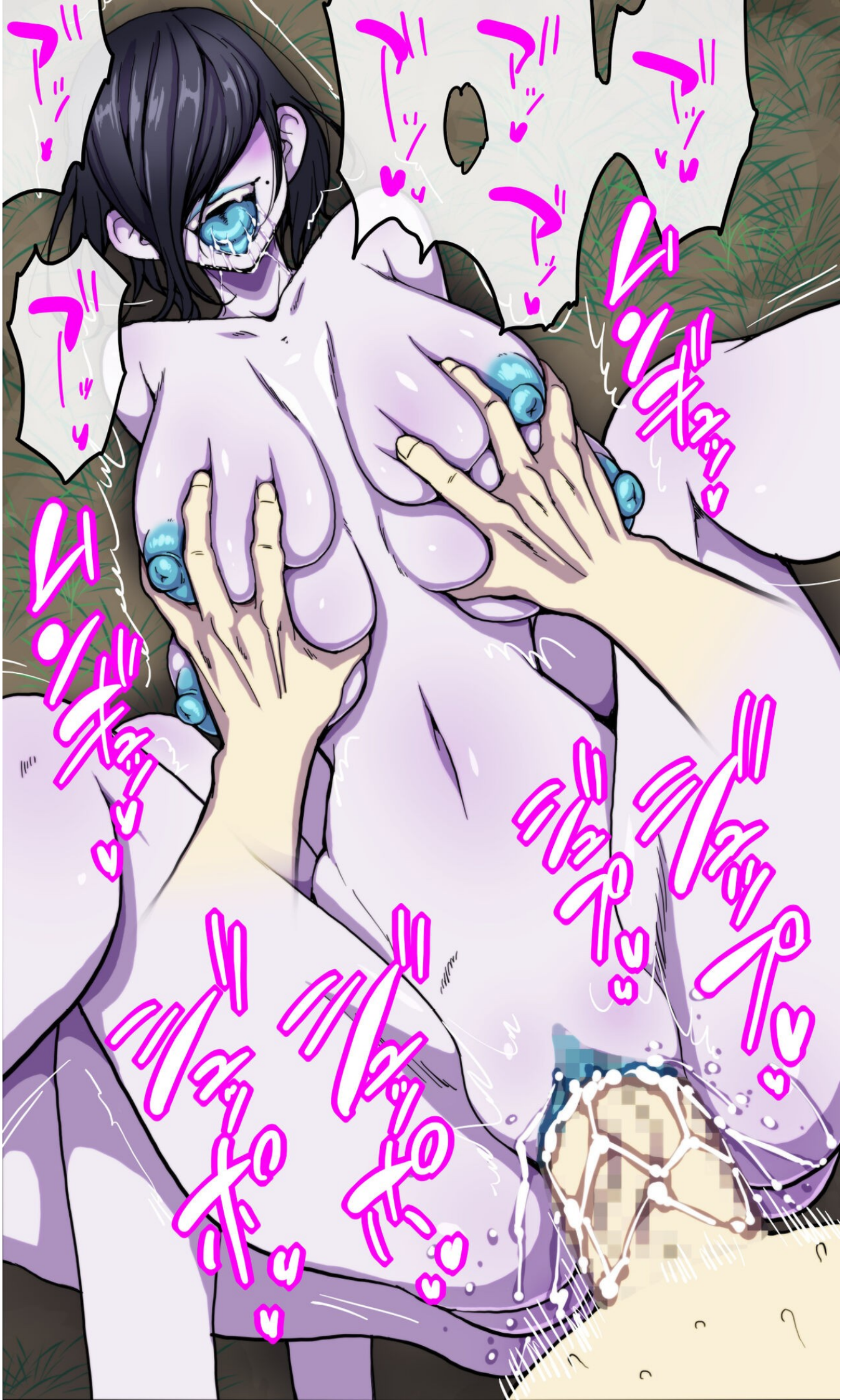
メスだと思った。

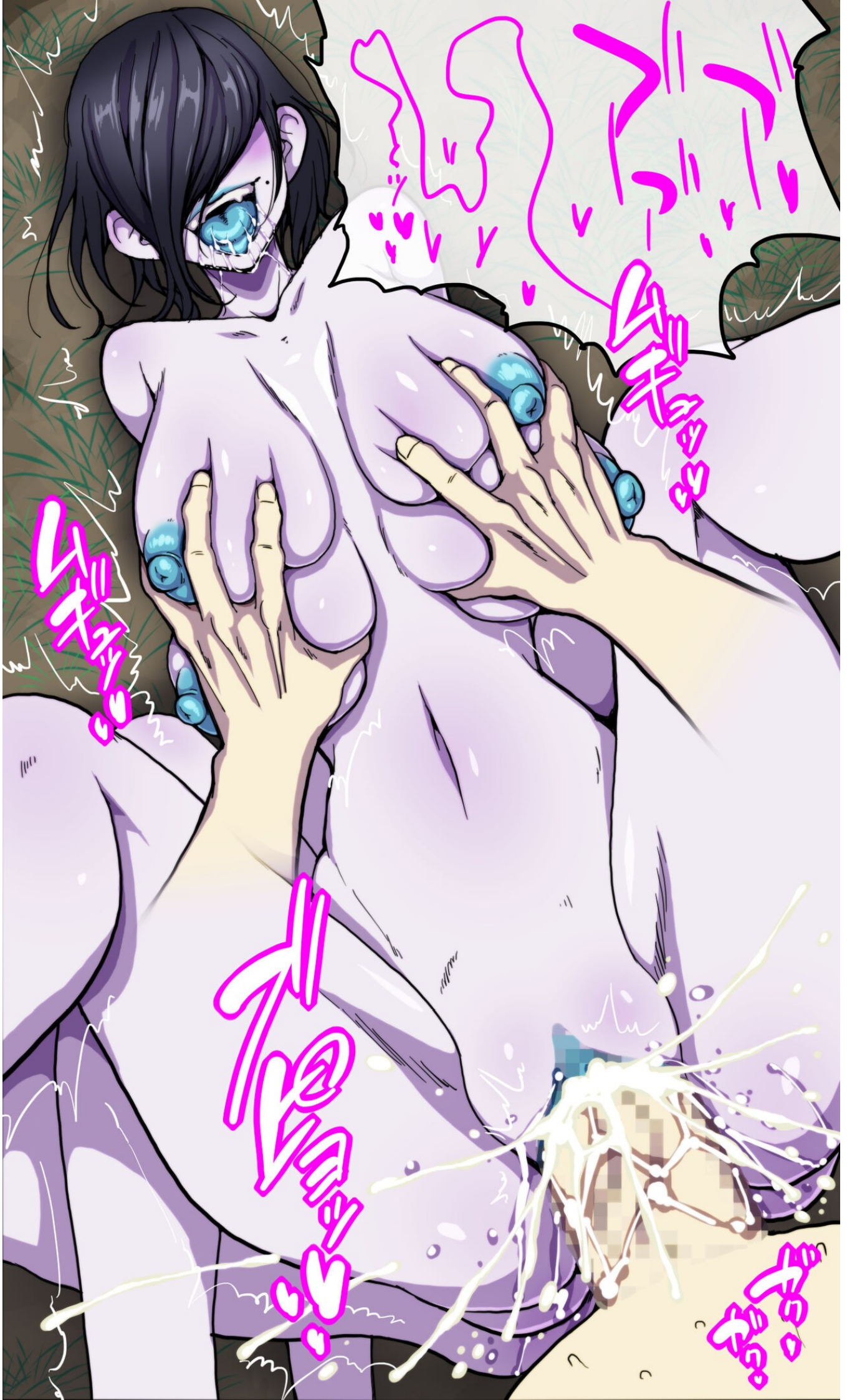
ビクッ

アッ

アッ
アッ
アッ







ソレの陰部から溢れ出す白濁液を見ながら思った。
もう自分は戻れないところに来てしまったと。



私は何度だって勃起した。
オマエがその気なら私だってやってみる。

ガ
ガ
ガ

ガ
ガ
ガ

ハ
ハ
ハ





ほらっつ、喘げっつ。

この変体の化け物めっつ。
人間様をなめるなっつ。





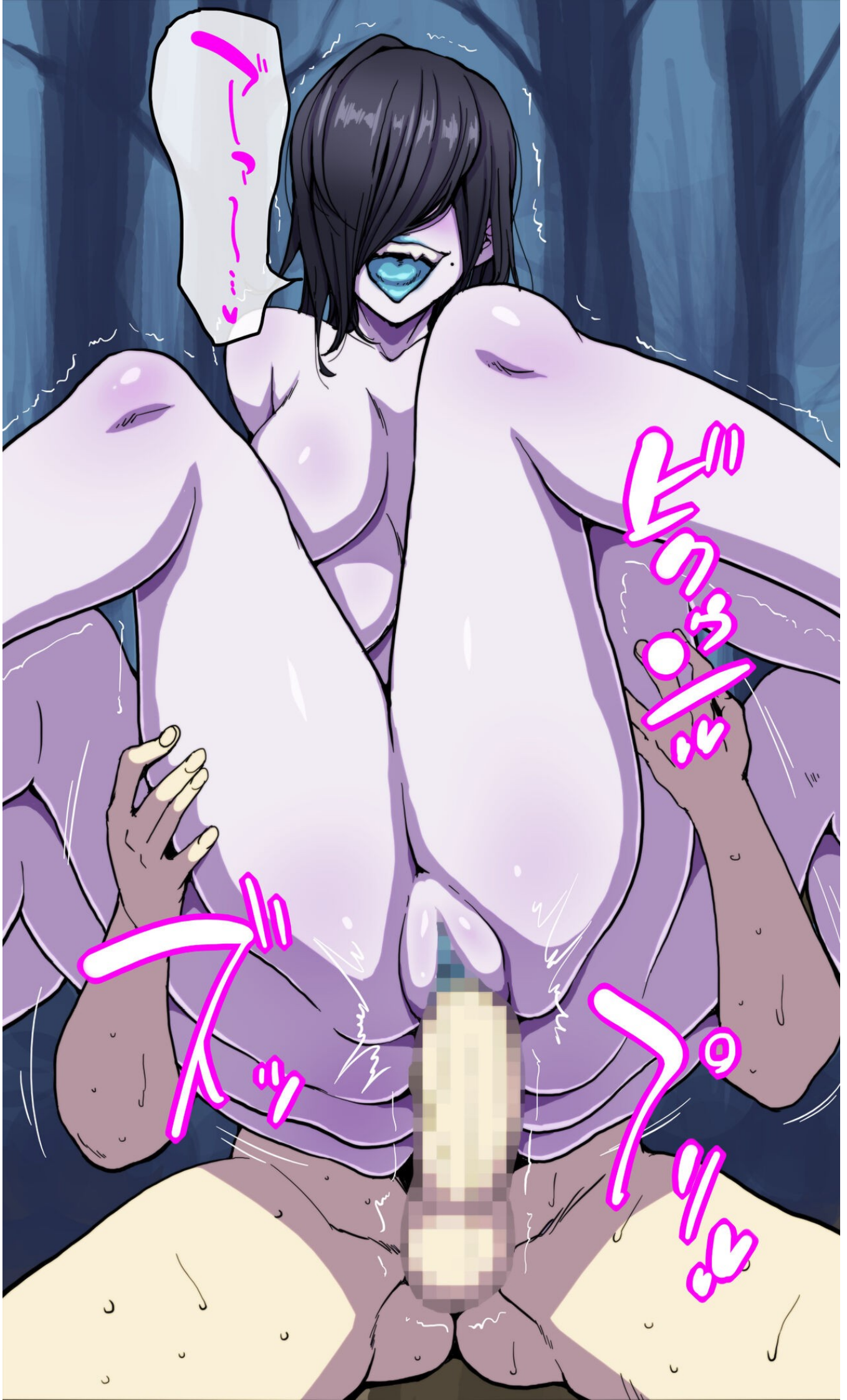
どうだ、気持ち良かっただろ。
いらなりやとひびきやうへんひる。



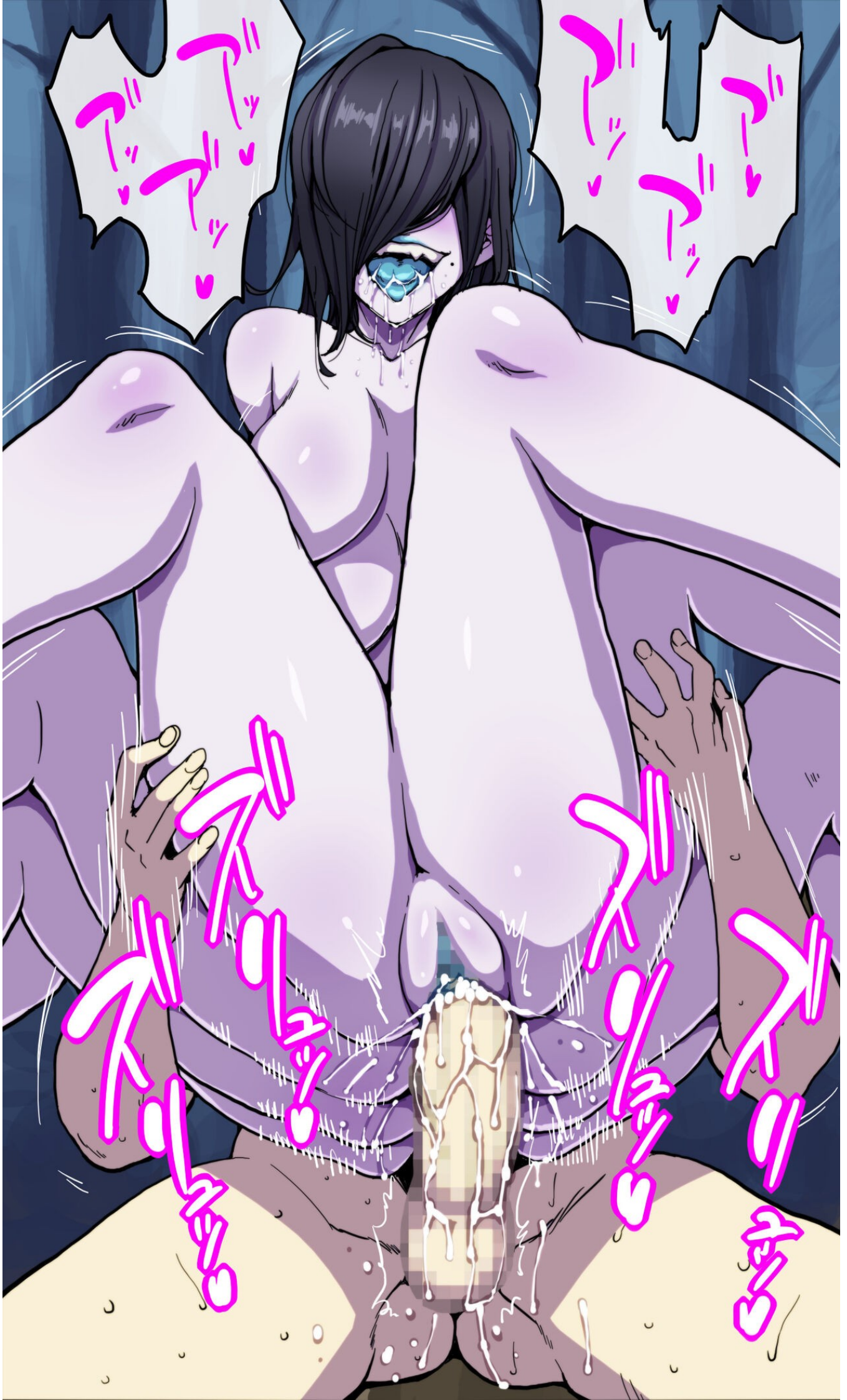
まだまだ足りないってツラをしてやがる。
そんなコイツにますます欲情した。
私は心も身体もケダモノのように
なっていくのを感じた。

く
ビビビ...













ヒタッ〜♡

プルプル♡

ズズズズズ♡

もう私は止まらなかつた。

走り出した列車は決して止められない。

私の精巣が精子をつくり続ける限り

射精し続けようとするだろう。











フツフツ

フツフツ

フツフツ

フツフツ

フツフツ

フツフツ

フツフツ



♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

私も彼女に応えようと
往復運動がより激しくなる。

アッ
アッ
アッ

アッ
アッ

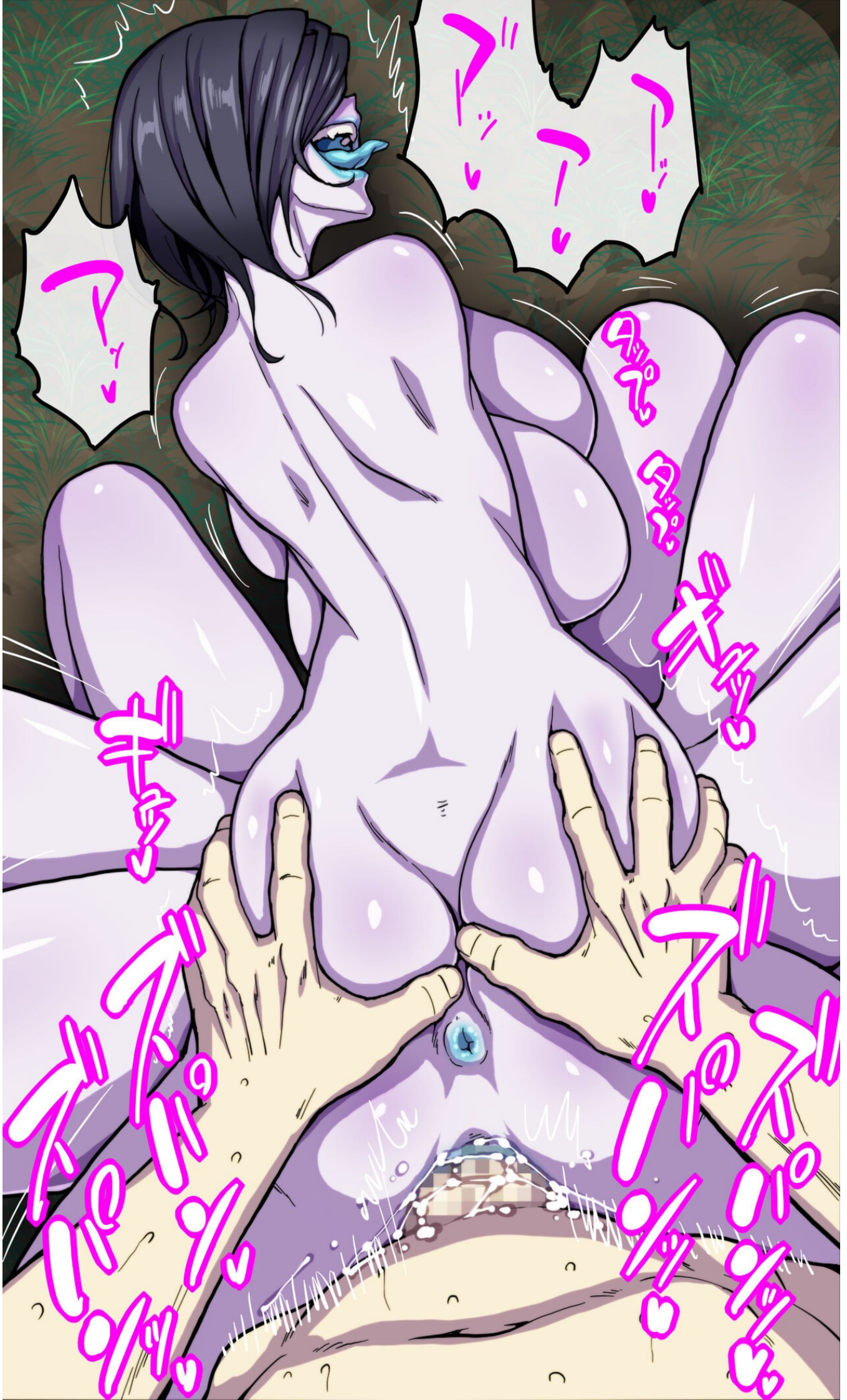
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ
アッ

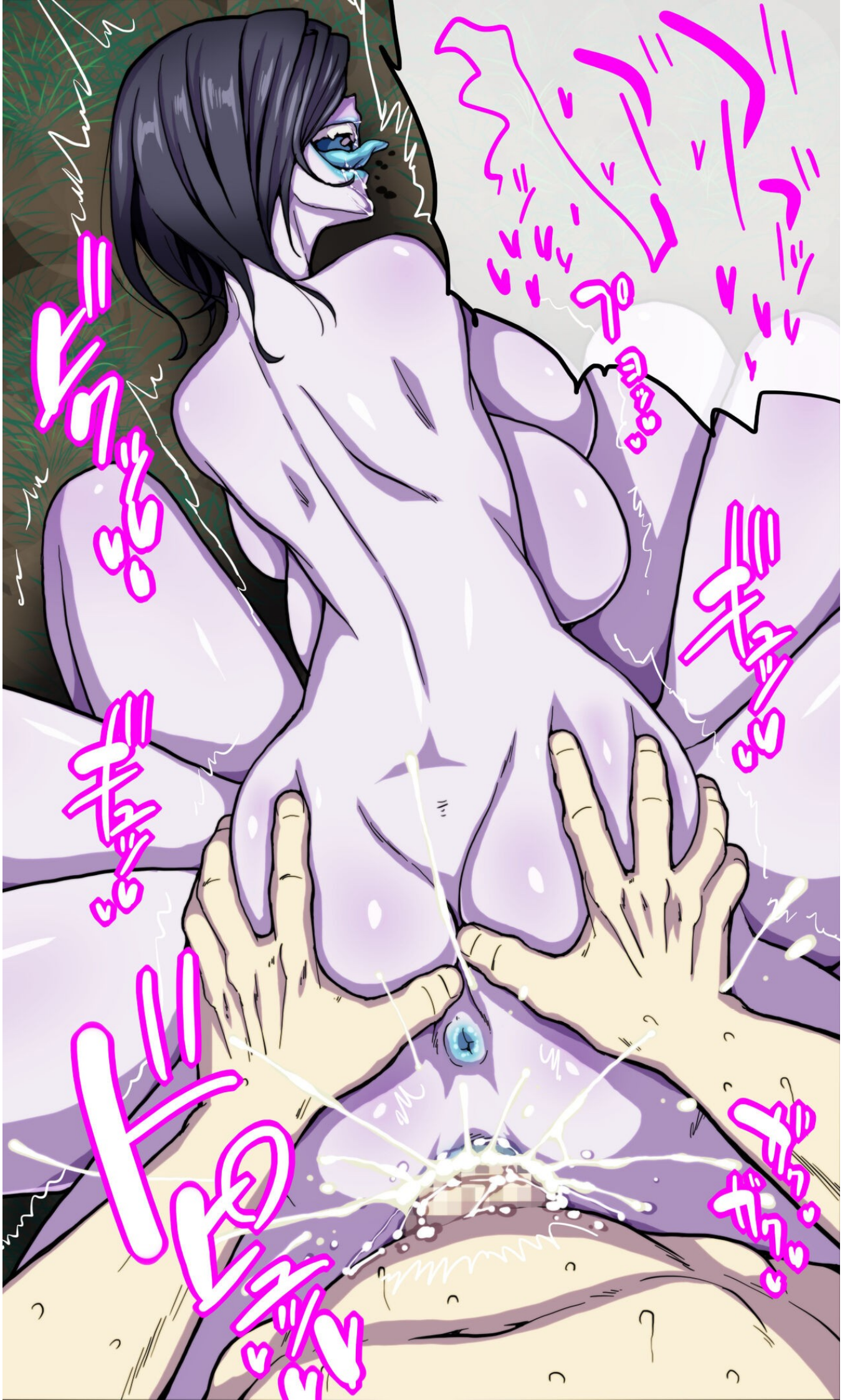
アッ
アッ
アッ













何度も身体を重ねていくうちに、
私は彼女に特別な感情を抱いていた。
人間とは得てしてそういうものだ。
決して私が異常なのではない。

レレレレレレ

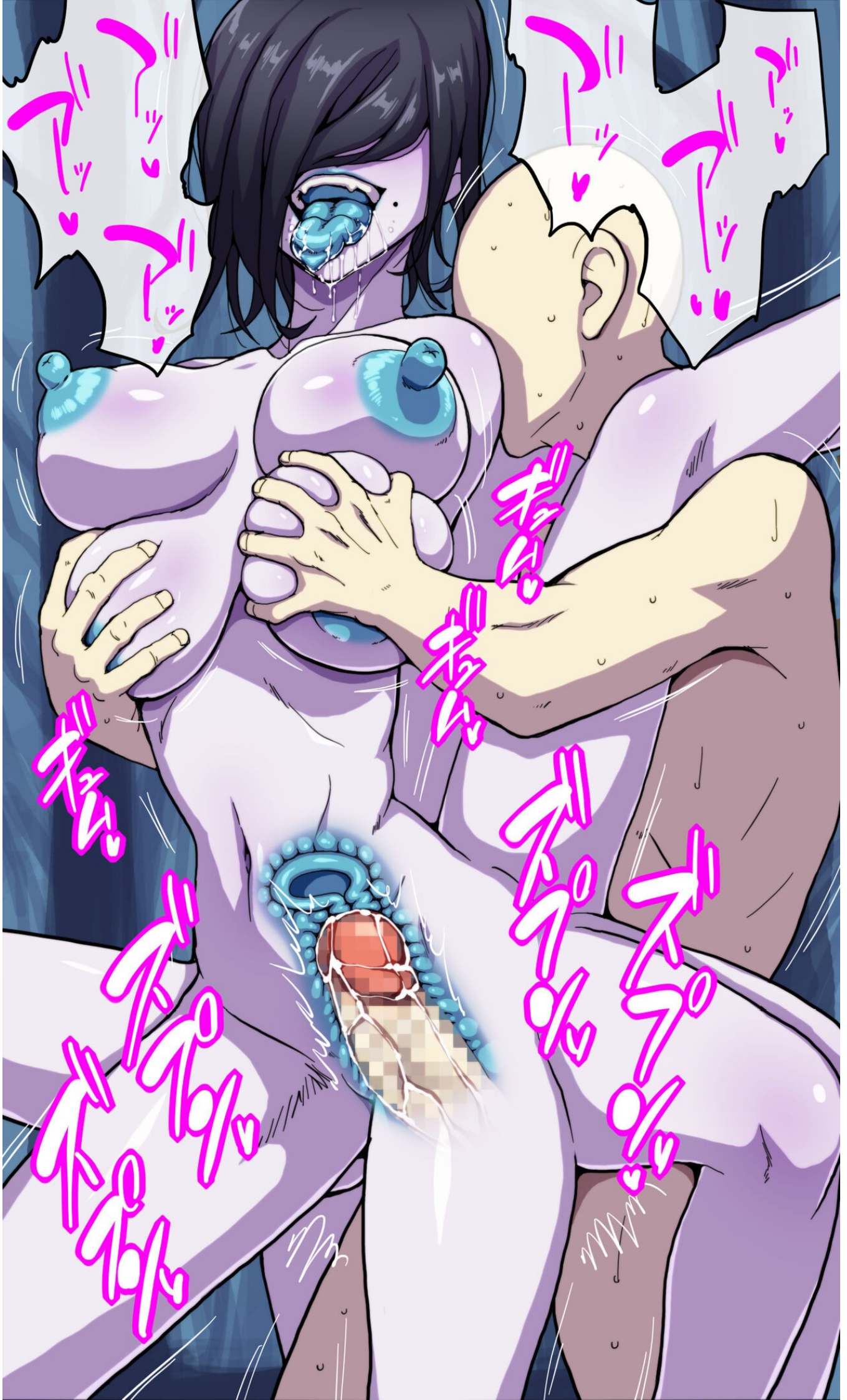
ググググ

ググググ

グググ









もう限界だ……。

私がここで力尽きても

彼女は許してくれるだろうか……。



ぐったりとした私を

休ませてくれるような優しさなど

彼女にはなかった。

そして私の身体も彼女の期待に

応えてしまう。

とびきり〜

タタ

カチカチ

グググ

ハハハ



ああ、なんて罪深いのだろうか。

私の精巣が命をすり減らして

精子を製造している。

もう既に限界など

通り越しているというのに。

ーっーっー

アッ

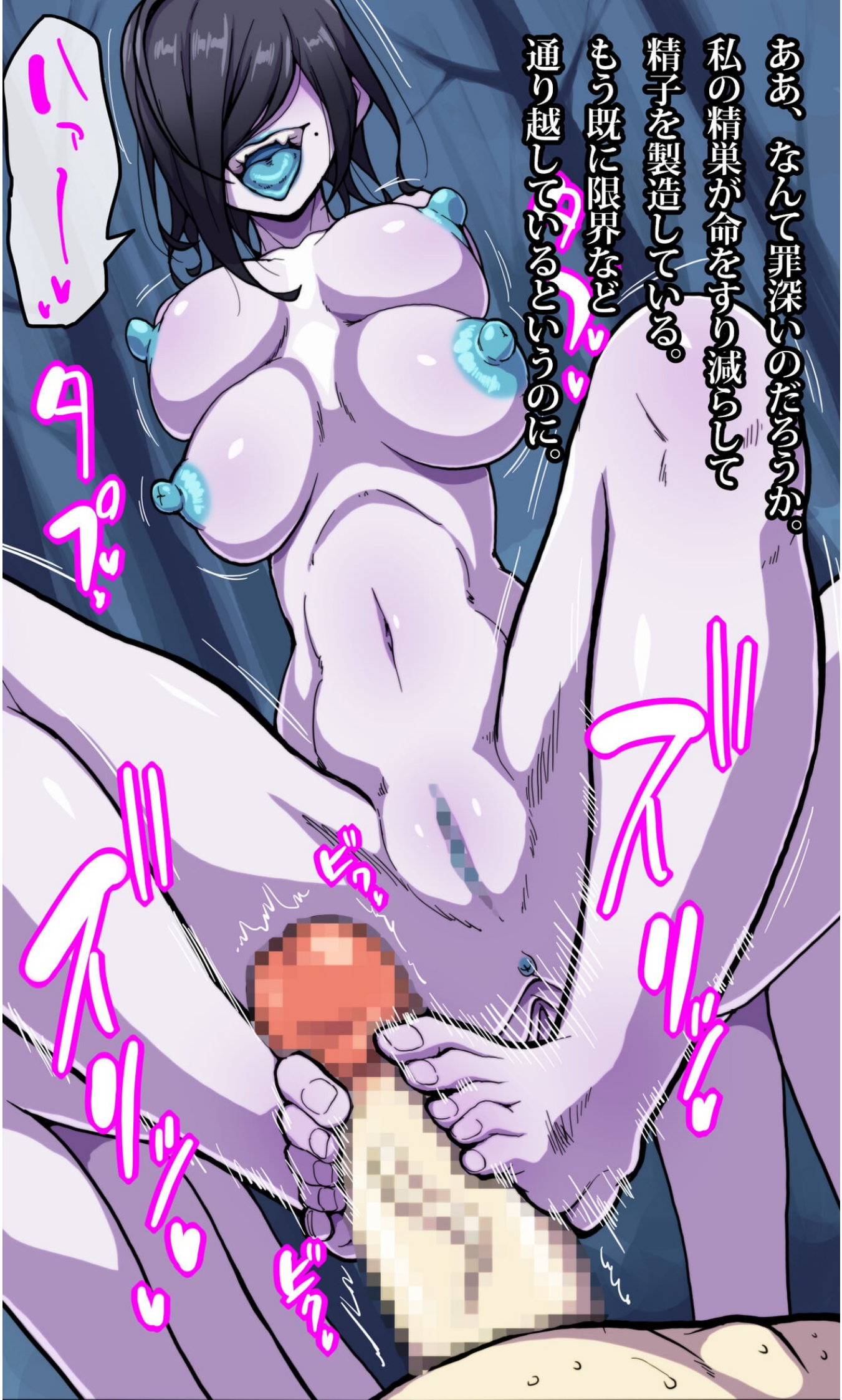
アッ

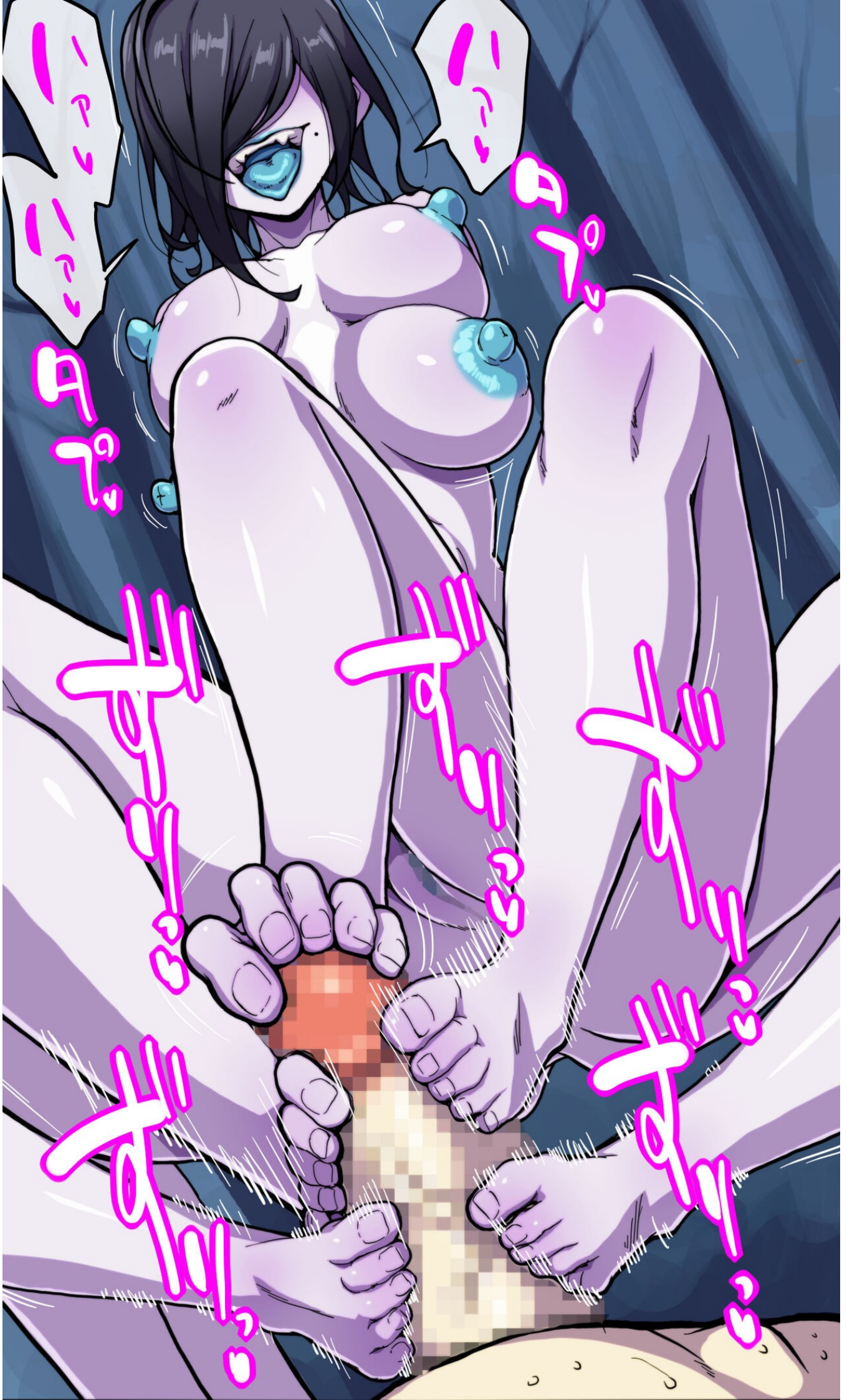
アッ

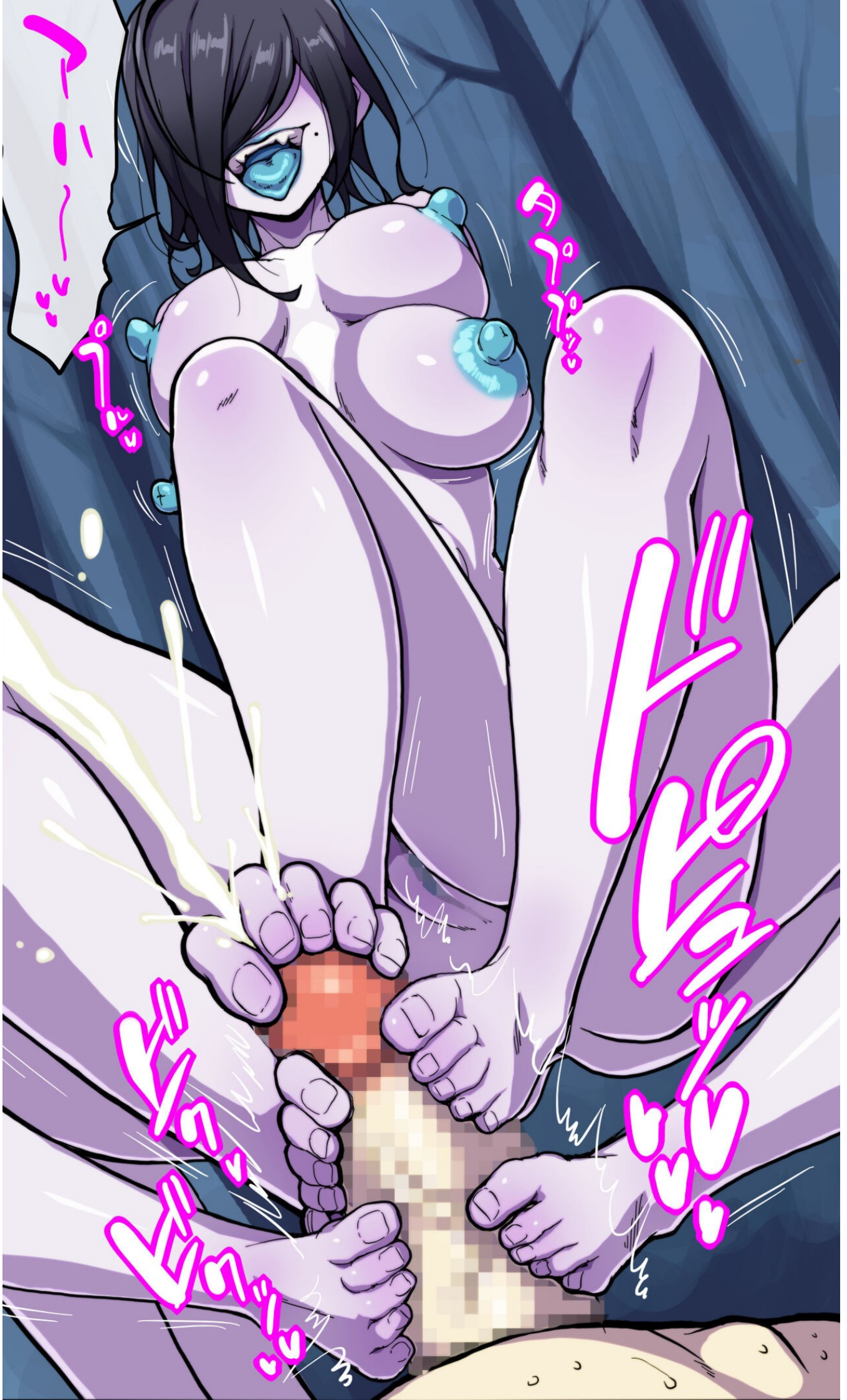
アッ

アッ

アッ





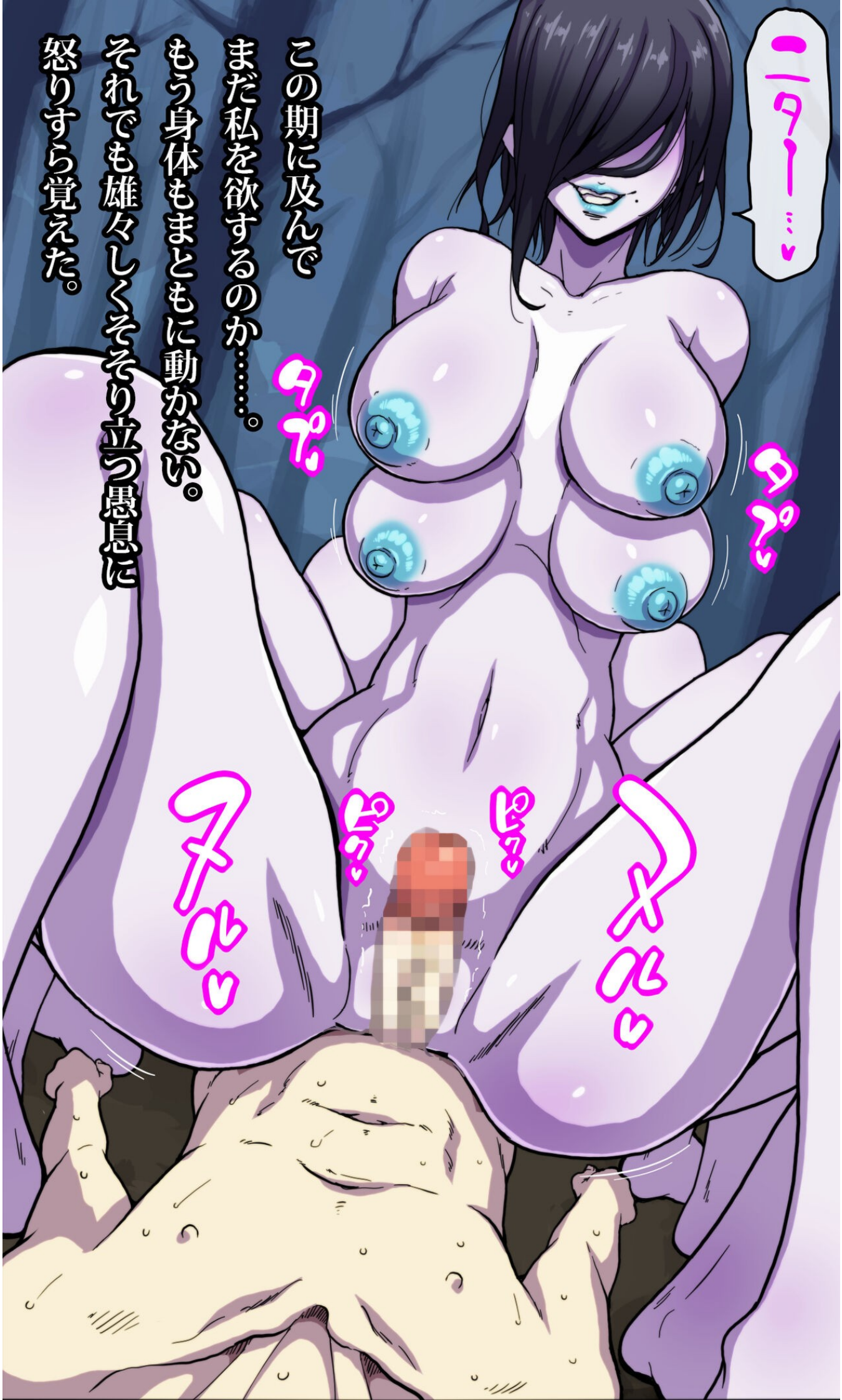


どうだ、お望み通り吐き出してやったぞ。
彼女の満足気な表情がなんとも嬉しい。



「……」

この期に及んで
まだ私を欲するの……。
もう身体もまともに動かない。
それでも雄々しくそそり立つ愚息に
怒りすら覚えた。



アッー...

アッー...

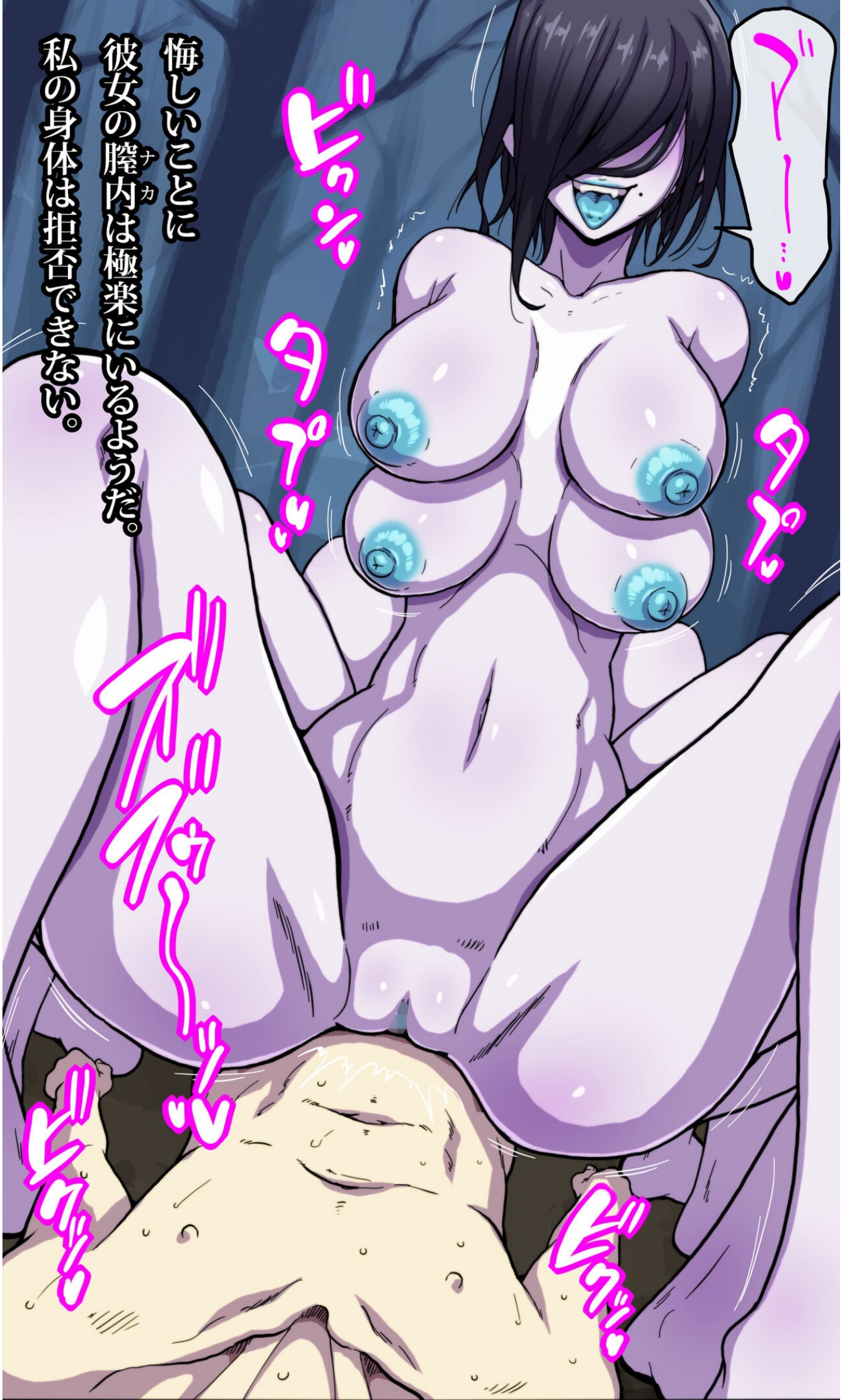
アッー...

アッー...

アッー...

アッー...

悔しいことに
彼女の膣内^{ナカ}は極楽にいるようだ。
私の身体は拒否できない。





あんなに可愛いわね。

あんな

あんなに可愛いわね。

あんなに可愛いわね。

あんなに可愛いわね。

あんなに可愛いわね。

あんなに可愛いわね。

あんなに可愛いわね。

あんなに可愛いわね。

あんなに可愛いわね。





最後のひと搾りを終わると意識が遠のくのを感じた。
このまま目を覚ますことが無くとも
今日のこの思い出が、私を安らかに逝かせてくれるだろう……。



ふと目を覚ますと、私は全裸で横たわっていた。

……どれくらい歩いただろう。

私は狂ってしまったようだ。

彼女が頭から離れない。

そして私は、彼女に狂ってなお、

彼女を探しに山の奥深くへと潜っていく。

面白いものだ、死を望んで彷徨っていたのに

彼女を再び抱くまで死にたくないと思っている。

いや、それだけのためにただひたすら山を徘徊する私は、

すでに死人と変わらないのかもしれない。

おわり